

随想 成功とは?!

成功や幸福は、自分自身の定義によって変わるもの

株P P Q C 研究所 加藤 宏光

若い頃から《成功》を目指してきた。《成功》とは何か、を深く考えることなしに。

結婚した頃にとまどき通っていた、英会話の教室があった。忙しくて毎週通うことができず、月一度が精いっぱい、時には数か月行けないこともあったのだが、教室で顔を合わせるメンバーは、そんな筆者を友として交わってくれた。

その教室では希望者を募って、春や秋にハイキングを楽しんでいた。行く先々での食事時、当時はまだ珍しかった外国人教師を囲んで語り合うのである。メンバーは、親しい誰かを連れていく(義務ではない)。筆者は、結婚して間もない妻を連れ

ていった。

あるメンバーは、二〇歳の友人を連れて来ていた。その友人は、英語に興味があるように見えなかったため、なぜ一緒に来たのかはわからない。

昼食時に、各々からいろいろな話題が出たが、何も覚えていない。ただ、先述の二〇歳君が自分自身に掛けている生命保険についての話だけが記憶に残っている。

「俺は自分に一億円の保険を掛けていた!!」と彼は話していた。

当時の一億円は、現代に換算すれば五億円以上にもなるだろうか?!

お金に頓着のない方であった

筆者にとっても、一億円はすごい。

「何で?」「尋ねると、「それだけの値打ちを自分に感じられるから…」と言う。

その後は覚えていない。ただ、彼の生きているのは《一億円の保険》に表されているのだろう。彼がその後どうなったのか知らない。人にとっての《成功》は、一概には定義できない。

『残酷すぎる成功法則』と題する書物がある(エリック・バーカー著、橋玲監訳、飛鳥新社出版)。

この本の訳者(橋玲氏)は、序文で次のように記している。「日本での成功秘訣の書物に

が、本稿の本分は、書物紹介ではないので、詳述は避ける。

ここに取り上げる部分が多くに強調されるモノではないことをお断りした上で、一部に焦点を当てよう。

【これぞコロンブスの卵―「退屈」をなくせば「努力」は必要なくなる―一五三頁】

作家のデヴィッド・フォスター・ウオレスはこう言った。

『もし退屈というものに抵抗力ができれば、成し遂げられないものは何もない』

いろいろな意味で、この言葉は真実だ。たとえばあなたが決して退屈しない人間なら、かなりコンピュータに近いといえる。コンピュータは、ありとあらゆる退屈な作業を人間に代わってこなしてくれる。しかも迅速かつ完璧に。

コンピュータには、ゲームのメカニズムがまったくいらぬ。退屈とも意欲の低下とも無縁だからだ。それでいて、人々のオフイスは、まるで機械のために設計

されているようだ。人間はコンピュータではないのに。

マルクス経済学は多くの点で間違っていたが、今になって正しかったといえることがいくつもある。労働者から仕事との心情的な繋がりを奪い、彼らをただの成果を生み出す機械として扱うと、労働者の魂を殺すことになる、というのがその一つだ。

このまま、引用を続けるには紙幅が足りないため、以下を抄訳しよう。

働く人々は、現在従事している作業に《意味・価値》を見いだせれば、退屈を感じない。今自分がやっていることが無意味・無価値であると感じるとき、人は最も疲れ、退屈する。それゆえに、効率も落ち、間違いもお

かす。従事している業務の意義を理解する、このことだけで明らかに《効率向上する》というデータが示されている(以上抄訳)。そういえばその昔、日本軍の体罰で《無目的な穴を掘らせ、

直ちに埋め戻させる、という作業を終わらなく続けさせる」というものがあった、と読んだことがある。この体罰を受けた被害者は簡単に精神を壊されるのだそう!

逆に、仕事の意義・価値を認識しながらの業務では、やっていることに楽しみを見つけられる。《努力》というのは退屈に耐える、ということに他ならない。つまり、今やっていることが楽しければ《退屈》はあり得ない、ということになる。

この書物には、考えてみれば当たり前でありながら、つい見逃していること、無視していること等を取り上げ《人間の持っている潜在能力を生かすことにより、成功者になれる》と説く。加えて《成功》の意義を問い直している。一般的には成功を、経済力を得ることや社会的地位を確保することと受け取っている。しかし、《成功》とは《本人がどのように受け止めているか、で定義が変わるもの》とし

ている。

は、①個人的成功体験を説く②成功者を例に引くという二パターンに分けられる。これらには、エビデンスがない。役に立つ成功法則を得るにはエビデンスを読み解くが必要である。この書物には普遍的な法則ではなく、エビデンスから自分で法則をたどれるようになっていく(筆者・加藤の意識)」と書かれている。

ざっと目を通すと、実社会でさまざまな成功を収めた人(失敗体験もある)の、環境まで含めた状況と結果が、著者(エリック・バーカー)の所感を含めて記述されている。

それぞれの項に、それぞれ興味味の湧く話題が述べられている。禅問答のように聞こえるが、《幸福》について、一般的には、経済力を得ることや社会的地位を確保すること等、単純に他人の評価が高くなること自体を成功幸福と考えるがちであるが、今ある自分で満足できることこそ《幸福》と受け止めるのは、至極の《幸福》かもしれない。

しばらく前に来日された《ブライタン国王夫妻》のたまたまから、幸せ度合いで国の力を測ることが語られたことがある。その際、筆者もブライタンという国について触れたことがあったが、彼の国では、今ある自分に満足する国風があり、すべての国民の表情が穏やかであることがとくに注目された。

幸せが物欲に制圧されている現代のほとんどの国では、このような形の幸せが得難いことは認めざるを得ない。しかし、金かね)がすべてである世の中を全面的に認めるのは、なんとなく敗北感を感じるのには筆者だけであらうか?!